

聖書：ヨハネ 21：1～14

説教題：さあ来て、朝の食事を

日時：2014年4月20日（杉並イースター朝拝説教）

復活後にイエス様が弟子たちにご自身を現わされた記事です。14節に、これが「3度目」であったと記されています。1回目は復活当日、トマスがいなかった時。2回目はその一週間後。そして3回目がこのテベリヤ湖畔で、となります。

ペテロは「私は漁に行く」と言い出します。彼はどういう意味でこの言葉を語ったのでしょうか。しばしばペテロは、主の召命を忘れて元の仕事に戻ろうとしたと説明されることがありますが、おそらくそうではなかったと思います。彼らがこの時、ガリラヤにいたのは主の命令に従ったのことと思われまゝです。ではなぜ彼はこのようなことを言ったのでしょうか。食べ物を得るために（生きる必要のために）こう言ったのでしょうか。あるいは他にすることがなく、何かを手をつけずにはいられなくて、とりあえず漁に行くと言ったのでしょうか。確かに嵐のような日々を過ごして来たペテロたちにとって、イエス様を待っている間、何らかの活動に没頭することは癒しのプロセスとして必要なことであつたかもしれません。

ところが一晩中働いても彼らは一匹の魚も取れませんでした。最も良い時間帯に漁をしたのに、何の収穫も得なかったのです。そうして夜が明けそめた時、一人の人が岸边から声をかけて来ます。その方はイエス様でした。しかし弟子たちはまだ気がつきません。朝の霧がかかっていたせいでしょうか。あるいは距離があつて良く見えなかったからでしょうか。あるいは復活後のイエス様には以前とは異なる場所があつたからでしょうか。その岸边に立つ人の「舟の右側に網をおろしなさい。そうすれば、とれます。」の言葉に従って、ダメもとでやってみるところ、何とおびただしい魚が網にかかつて引き上げることができないほどになります。この瞬間、イエスの愛されたあの弟子、すなわちこの書の著者ヨハネが「主です！」と気が付きます。20章8節でもそうでしたが、ヨハネは洞察の早い人でした。そしてペテロは急いで上着をまとって湖に飛び込みます。こちらは何においてもまず先に行動する彼らしい姿です。そうして網を陸地に引き上げると、それは153匹の大きな魚で一杯でした。またそれほど多かつたけれども網は破れませんでした。果たしてこの記事は何を語っているのでしょうか。

私たちがこれを読んで思い起こすのは、前にもこれと似たような出来事があつたということでしょう。ルカの福音書5章のペテロが主の召命を受けた時の記事です。あの時もペテロたちは一晩中働いて何も取れませんでした。しかしイエス様に言われて、深みにこぎ出して網をおろしたところ、信じられないほどたくさんの魚が入り、網は破れそうになりました。その時、ペテロはイエス様の足もとにひれ伏して「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。」と言います。その時、主は「こわがらなくてもよい。これから後、あなたは人間をとるようになるのです。」と言われました。あの記事と非常に良く似ています。そのため、ある人たちは、これはもともと一つの出来事だつたのではないかと言います。ルカはそれを早い時期の出来事として記し、ヨハネは復活後の出来事として記している、と。しかし

この二つの記事は確かに良く似ていますが、違う点も色々あります。たとえばルカの記事では網をおろしなさいと命じたのはイエス様であることを弟子たちは最初から知っていましたが、ヨハネの記事ではそうではありません。またルカの記事ではイエス様はペテロたちの舟に同船していましたが、ヨハネの記事では離れた岸辺に立っておられました。ですから似てはいるが別々の出来事と見るのが自然だと思います。そしてそう見る時に、一層意義深いメッセージが浮かび上がって来ると思います。

それは今日の記事は、弟子たちの再召命としての意義を持つ出来事であったということです。なぜ前と同じようなことが、もう一度繰り返される必要があるのか。それは弟子たちはイエス様を裏切り、イエス様を見捨てるということをしてしまった人たちだからです。2節の筆頭者ペテロは、イエス様を3度も繰り返して知らないと否認した人です。2番目のトマスはイエス様の復活など決して信じないと言った人です。その他の弟子たちもみな、イエス様が捕まえられた時にはあっさり逃げて行った人たちです。そんな彼らはもはや弟子としてはふさわしくないと行って、イエス様の方で見捨ててもおかしくありません。しかし復活の主は、そんな彼らにすでに二度現れ、このガリラヤでもう一度、かつての出来事をコピーするかのような経験をさせておられるのです。ペテロたちはかつての日のことを思い起こさずにいられなかったでしょう。あの日、主が「あなたはこれから人間を取るようになるのです！」と言われたことを。主はこのことによって、なお変わらず、彼らをご自分の働き人として召しておられることを示されたのです。

そしてここにはさらにどんなメッセージが含まれていたのでしょうか。ペテロをはじめとする弟子たちは、この道のプロです。ガリラヤ湖は彼らが長年働いた職場です。この湖のことなら、他の誰よりもよく知っています。知識も経験も人一倍あります。ところがその彼らが一晩中働いても、何も取れませんでした。なのに、主の指示に従った時に大変な大漁となりました。これで思い起こされるのは今日、招詞で読んでいただいたヨハネの福音書15章4～5節の御言葉です。「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」ここに私たちは主にとどまっていなければ何の実も結べないと言われていています。しかし主に連なるなら多くの実を結ぶことになる。この時、網にかかった魚を数えたら、大きな魚ばかりで153匹もありました。この153という数字には何か意味があるのでしょうか。ある人は当時の世界で知られていた魚の種類は153だったと言います。つまりここには全世界のあらゆる人々に福音を伝え、その人々を救いに導くという象徴があると言います。またある人は153という数字は、 $1+2+3+4+$ 、と足して行って17まで足した数の合計で、17という数字は十戒の10と完全数の7、あるいは黙示録に出て来る7つの御霊の7を足したものだと言います。初めて聞いた時はビックリしますが、結論から言えば、果たしてそれがここで意図されているメッセ

一じなのかどうかは何とも言えません。多くの注解者は、以上の諸説に触れながらも、積極的には支持しておらず、むしろヨハネが一番言いたいことは、非常に多くの魚が取れたということだろうと言っています。また網が破れなかったという奇跡も同時に生じている、と。

これは復活の主を知る教会にとって大きな励ましのメッセージではないでしょうか。この魚の話は、かつてと同様、人を救いへとすなごる福音宣教を象徴する出来事です。私たち自身を見るなら、ここにいた弟子たちのように、それ自身では無力な者たちでしょう。それなりに知識はあるかもしれませんが。それなりの経験もあるかもしれませんが。しかし人間の力では一晩中働いても何の成功にも至らない。しかしそんな私たちでも、復活の主によるなら、このような働きをなすことができる。私たちはこの主を見上げて、もう一度与えられた使命に励みたいと思います。主はここで約束してくださいました。主に従い、主により頼むなら、愚かな者たちでもこのように神の国のために用いて頂けるということを。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結ぶことができる、と。

さて、今日の箇所にはもう一つの場面が出て来ます。それは陸に上がった弟子たちの朝の食事の場面です。一晩中働いた彼らのために何と朝食が用意されていました！それはイエス様が用意くださったものでした！9節：「こうして彼らが陸地に上がったとき、そこに炭火とその上に乗せた魚と、パンがあるのを見た。」弟子たちの知らない間に主が用意くださっていたのです。何という優しいイエス様のお姿がここにあるでしょうか！

ここに私たちの肉体の必要をも心にかけてくださっているイエス様の姿が示されています。イエス様は私たちの信仰とか霊的な事柄にばかり関心があるのではありません。夜中じゅう働いて疲れ切っている彼らの肉体のことも主は心にかけてくださっていた。私たちの日々の歩みは、このような心で私たちを慈しみ、守ってくださる主のもとにあります。

またここには霊的な意味も含まれていたでしょう。それは福音書の色々な箇所にも示されているように、食事への招きは交わりへの招きでもあるということです。そしてイエス様との食事の交わりは、やがての御国の前味となるものです。このことを先の一つ目の場面と組み合わせる時に素晴らしいメッセージが見えて来るのではないのでしょうか。それはすなわち、私たちはただ働くのではないということです。153匹ものたくさんの魚を取ることに、神の国のために働くことだけが私たちの目的ではない。私たちはこの働きをイエス様との深い交わりの中でするのです。イエス様が与えてくださる養いにあずかりながらするのです。復活の主が勝ち取った御国の祝福に十分に生かされ、強められながら行なうということです。

イエス様がここで彼らのために炭火をおこし、魚とパンを用意くださったことは不思議なことのようにも思いますが、イエス様は私たちの救いのために十字架上にご自身をささげて私たちに仕えてくださったお方です。そのイエス様と、朝食を準備してくださったイエス様は一つです。そしてイエス様は前に「あなたがたは、わたしの国でわたしの食卓について食事をする」と言われたように、やがての天国でもホストとして私たちに仕えてくださいます。私たちはこのイエス様がくださる養いの中で生かされ、慰められ、元気づけられることとセットで、御国のための働きに仕えるように召されているのです。私たちを赦し、愛し、慈しみ、いのちに生

かしてくださるイエス様の祝福を心から味わい、喜び、感謝しながら、御国のためのさらなる働きに励むように召されているのです。

死からよみがえられた復活の主は、今日も生きておられます。そしてこのご自身の恵みに生きるようにと一人一人を招いています。私たち自身は弱く、罪深く、見捨てられて当然の者たちですが、主がこのような恵みに満ちた主であられるので、どんな者にも希望が与えられています。私たちは主の「さあ来て、朝の食事をしなさい！」との招きを心から感謝して受け入れたいと思います。主はそういう私たちをご自身のさらなるご計画のために用いてくださいます。何も取れなかったところから 153 匹の大きな魚で一杯であったという働きをなす者として頂けます。この復活の主とその約束を信じて、主のみことばに聞き続け、主に祈り続け、主の御国のさらなる拡がりのために用いて頂く幸いに生かされて行きたいと思います。